



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	外国語教育について
Author(s)	大平, 具彦
Citation	高等教育ジャーナル, 1, 14-18
Issue Date	1996
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.1.14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29869
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_P14-18.pdf



外国語教育について

言語文化部教授 大平 具彦

はじめに

現在、外国語教育が大きな曲がり角を迎えていることは各方面から言われております。考えねばならぬ点は多数あるのですが、今日のこの会では、北大の外国語教育が抱えているいくつかの問題(およびそれに対する考え方)の提示に一応ポイントを絞り、それらの点についての活発な意見交換を通して、今後の検討のための基礎づくりの作業としたいと思います。

現行カリキュラム体制

先ず、現行カリキュラム体制の大まかな枠組みを説明しておきます。外国語は2か国語が必修(外国語Ⅰ、外国語Ⅱ)で、それを2年目前期あるいは後期まで履修します。2外国語のうちこれまで必修だった英語は、平成7年度から必修の枠そのものはなくなりましたが、理系学部は英語を必修に指定し(外国語Ⅰ)、文系の学生も例外的なほんの少数を除いて英語を外国語Ⅰとして選択しています。必修単位数は文系が6~8単位、理系が4~8単位となっています。外国語Ⅱとして、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語から一つを選択します(平成7年度の履修者割合はそれぞれ48%、24%、5%、23%で、昨年度と比べ、ドイツ語、ロシア語が相当に減り、フランス語は微増、中国語が激増しました)。必修単位数は文系が8単位(1年目は週3回)、理系が4~6単位です。このほかに第3外国語(選択)として、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、イタリア語、スペイン語、朝鮮語、ポーランド語、チェコ語、ハンガリー語が開講されており、同じく選択科目とし

て、それぞれの外国語について、3、4年生向けに(英語は1年次から)外国語特別講義が開講されています。

問題点

さて、こうしたカリキュラムで外国語教育はしかるべき成果が上がっているかという問題ですが、率直に言って教育効果は必ずしも充分ではないと認めざるを得ません。英語の実際の運用能力習得はいまひとつですし、その他の外国語は、学生の側にその外国語が実際にどこまで必要なのかという気持が潜在的にあるようで、ただ単位のため履修している学生が多く見られます。学生の方については、知識暗記型の受験教育、発信できる能力を育てない受験英語教育のせいで、履修態度が極めて受動的であるという、これまた大変大きな問題点があります。さらに言えば1クラスのクラス・サイズは40~50人と大人数で、これでは勢い教授法も従来型のものに傾かざるを得ません。

このような問題点を全体的に突き詰めてゆくと、よく指摘されるように確かにコミュニケーション能力を養成しないこれまでの教授法にも問題はあるのですが、最大のネックは、能力も動機も意欲もばらばらの学生が、適性規模を超えた大人数クラスで、ほとんど画一的なカリキュラムのもとで履修している点にある、ということが言えます。この体制を続けている限り(例え教授法を多少変えたとしても)学習効果は大して上がらないでしょうし、一番の問題は、単位を取るだけでいい学生ならばいざ知らず、実際に能力も意欲もある学生が実力を伸ばせぬまま、全体の中に埋没していつてしまうことです。われわれ教師

は、習性として、学生の能力の全体的底上げを志向するのですが、理念としてはそれでいいとしても、それが画一的なシステムでなされる限りは、むしろ全体が伸び悩んでしまうのです。

現実的な問題設定

それではどうするのか。抽象的な理念からではなく、現実的な目標設定に立ってこの問題を考えるならば、それはとりもなおさず、実際に外国語を曲がりなりにも「運用できる」学生を一定人数どのように作り出すか、という問題であろうかと思えます。一定人数とは、ごく大ざっぱに私が考えるところでは、各年度の北大入学者を2500人とすれば、英語はその内の5人に1人として500人、英語以外の外国語はさらにその5分の1としてドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語等々全体で100人（そこまでいかないかも知れない）、といったところが一応の目安となりましょう。そのためには、能力別、技能別のクラス編成、少人数クラス（20～25人）を基本にした履修形態が実現されねばなりません。一方、それ以外の学生はどうするのかと言えば、もちろん一定の単位は履修せねばならないとして、これまでの必修単位をある程度削減しつつ、それを外国文化理解、異文化理解に主眼を置いた言語文化科目の履修で代替してゆくべきでしょう。つまり、学生に対しカリキュラム上2つのコースを用意し、どちらのコースを履修するかは学生の選択にまかせることで、これまでのように一律、画一的ではないそうした履修方式に踏み出すべきではないか、その方が教育効果ははるかに上がるのではないか、と思うのです。

なお、こうした考え方を突き詰めてゆけば、いっそのこと必修の枠を取り払って、外国語を完全な自由選択制にすればよいではないか、という意見に行き着きます。私も以前はそうした意見に傾いていましたし、大学とは、外国語のみならず、どの科目においても必修というものはなく、

すべてが自由選択である、というのが本来の姿であろうとは思いますが。ただ、ここ数年間、実際に授業その他で学生と接してきた経験から言えば、ほんの少数の例外を除いて積極的、能動的な選択能力がほとんど育成されておらず、「こうしなさい」という指示がない限りは自分からはまずやろうとはしない彼らの行動パターンから見て、果たして自由選択制はしかるべく機能するのかいささか危惧する点があり、少なくとも彼らを「立ち上げる」ためのメニューなり枠組なりは教育上どうしても必要であろう、と現在では考えている次第です。

外国語教育の総合化

あと2つ付け加えたい点があります。ひとつは外国語教育の総合化です。先程、外国文化理解、異文化理解のための言語文化科目と言いましたが、外国語教育には語学プロパーの部分と、それを鍵あるいは入口としての、その背後にある外国の文化・社会の理解というリベラル・アーツ的側面とがあり、外国語プロパーの学習へと向かわせる意欲と関心を喚起し高める上からも、リベラル・アーツ的側面は積極的に取り入れられてゆくべきであると考えます。特に、先にお話したような、外国語を中、上級のレベルまで学ぶコースを選んだ学生に対しては、3、4年のクラスでは外国人教師による外国文化研究というクラスも含む、様々なメニューの言語文化科目を用意すべきと思っています。

継続的履修システム

今、3、4年のクラスと言いましたが、もうひとつは、外国語を本格的に習得するには継続性が欠かせぬ条件でありますので、これまでのように外国語履修を1、2年次で終えてしまうのではなく、3、4年にまでそれを継続できるような（現在でも一応は可能）、4年間一貫学習体制をつくることで

す。その発展的形態としては、これまでのような一律の年次進行制そのものをやめて、学生各自がそれぞれに履修時期と期間を決め、段階別（および技能別）に設けられた各外国語授業クラスを、それぞれの意欲と必要性と能力に応じてステップ・アップしてゆくという履修システムが考えられます。これは学生の側の主体性を引き出しつつ教育効果を高める大変よいシステムであると思われる。是非実現をめざしたいものです。

討 論

A: 私の学部では、語学についてかなり議論をし、英語は使えるようにして欲しい、第2外国語については、その国の文化を知ることが重要である、という意見が多くを占めました。

大平: 北大生の全体を、英語をできるようにするには、入学時からすでにばらつきの大きい学生一人一人の語学能力の差、履修時間数、大人数クラス、教官スタッフの数からいって無理だと思います。現在、英語が使えるようになる学生がどのくらいいるかは定かには言えませんが、ランク別のクラスを設けることで、これを500名ぐらいいは生み出せるシステムにしてはどうか、というのが私の考えです（500人は北大生2500人の5分の1にあたります。この5分の1すなわち2割という数字は、大体どのクラスでも2割ほどが「出来る学生」でそのクラスを引っぱっている、というこれまでの教育実感、教育経験から来ているのですが、「どの集団でも2割の者がその集団の生み出すものの8割を占める」という有名な経済法則があり、それは不思議と色々な社会現象にあてはまるそうです）。第2外国語については、確かに今後は、語学プロパーだけでなく、その国の文化・社会の理解も大いに取り入れてゆくべきと思います。ただ人数は多くないとしても、第2外国語を使える学生（これについても500人の5分の1と考えて100人）も是非育てるべきです。

B: 書くことについては現状でもよいと思います。

さらに、会話の能力を加えたい。例えば、教師を二人にして実際の会話の様子を聞かせたりするのはどうですか。

大平: 現在の教員数ではちょっと不可能です。

総長: 言語文化部にTA（ティーチング・アシスタント）を付けることも考えられますね。ところで、言語教育には短期集中がよいか、時間数が少なくても長期にわたる方がよいか、どちらですか。

大平: 外国語学習には短期集中が望ましいのは明らかです。でも得た力を維持、展開するには（時間数はそれほど多くなくても）継続して学ぶことが是非とも必要です。

C: 私はロスの少ないレベル別の教育が望ましいと思っています。

総長: 効果的に教育するためには、レベル別、技能別編成として、どれを選ぶかは学生個々の自己申告制でやってみてはどうでしょうか。また、学生の、英語を書く能力の低下、日本語を書く能力の低下にも目を向ける必要があります。

補 論

後日（96年1月8日）、上述の報告を基礎に、「レベル別クラス導入カリキュラム試案」をプランニングして報告したので、参考のために資料として掲げておきます。なお、この案はあくまでも個人的な案であることをお断わりしておきます。（大平 具彦）

外国語教育

レベル別クラス導入カリキュラム試案

(1) 目的

現在の外国語教育が必ずしも十分な教育効果を上げ得ていない主たる理由が、能力も動機も意欲もばらばらな学生が、適性規模を超えた大人数クラスで、ほとんど画一的なカリキュラムのもとで履修している点にあるという判断に立って、通常

クラスとは別に，能力別・技能別の少人数インテンシブ・クラスを新設することによって，現行カリキュラムでは埋没しがちな，実際に能力も意欲もある優秀な学生を伸ばすことをめざす。

(2) カリキュラム骨子

(a) 各外国語とも，週2回（半期2単位）の通常クラスのほかに，週4回（半期4単位）のインテンシブ・クラスを設ける。

(b) インテンシブ・クラスの履修は本人の希望および能力判定テストに基づく。

(c) クラス・サイズは通常クラスは現行にほぼ近い40人～45人，インテンシブ・クラスは25人が望ましいが，30人程度からスタートすることも可。

(d) 一学年2500人のうち，インテンシブ・クラス履修者は英語で500人程度，独・仏・露・中全体で100～200人程度を想定。

(e) 英語は入学試験の成績あるいは4月授業開始前の統一テストによってクラスを振り分ける。独・仏・露・中については，1年前期終了後の統一テストによって振り分ける（1年前期は全員通常クラスを履修。但し1年後期からのインテンシブ・クラス履修希望者向けに必修の演習クラスを2コマ開講）。

(f) インテンシブ・クラスの週4コマは技能別の授業を原則とする。

(g) インテンシブ・クラス履修者は3期継続で12単位必修とする。通常クラス履修者は3期継続して6単位まで（学部によって4期継続8単位まで）取れる。

(h) 外国語必修単位は，2か国語以上を含んで，12単位（そのうち，1外国語は4単位以上）とする。但し，12単位のうち2単位は外国文化コースの授業履修による振り替えを認める。

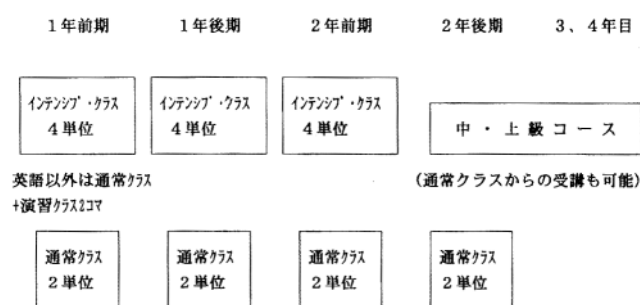
(i) 外国語の履修は継続的に単位を取ることを条件として，3～4年次までの履修も可能とする。

(j) どの期からも履修が開始できるように，通常クラス，インテンシブ・クラスとも各年度前期，後期それぞれに3段階のレベルの授業を開講。

(k) 通常クラスからインテンシブ・クラスへの編入も場合によっては可能にしておく。

(l) 上記の通常クラス，インテンシブ・クラスのほかに，4年間継続して学べるように，2年目後期，3，4年目に自由選択単位として，中，上級コース（外国文化研究も含む）を開講する。

(3) 概念図（基本型）



(4) 備考事項

(a) 現行カリキュラムとの負担度比較

負担コマ数を計算すると，英語はややきつく，その他の外国語についてはやや余裕あり。そのため英語は当初はインテンシブ・クラスは1クラス30人，通常クラスは1クラス45人でスタート。

(b) 過渡的にはその形で展開するとして，その間に他の外国語から英語に定員を数名振り替える必要あり。また，インテンシブ・クラスは週3回4期で12単位という展開も可能かも知れない。

(c) 3，4年目の授業の履修を促すため是非自由選択単位科目として欲しい。

(d) インテンシブ・クラスと通常クラスとのレベル差を考え，インテンシブ・クラスには「秀」の評価を加える。あるいはインテンシブ・クラス修得者には北大独自の外国語免状を出すことも考えられる。

(e) 通常クラスは形態的には現行とほぼ同様の授業展開であって，決してレベル・ダウンではない。インテンシブ・クラスでも通常クラスでも，これからはハイ・レベルの教育機器の導入が計画されているので，教育効果は通常クラスにおいても充分高まるものと考えられる。

(f) 英語については、通常クラスの中にリメディアル・クラスを別に設ける必要もあるかも知れない。